

故郷第七場面 読んだ読んだ

それからまた九日して、わたしたちの旅立ちの日になった。ルントウは朝から来ていた。シュイシヨンは連れずに、五歳になる女の子に船の番をさせていた。……すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、もとは鮮明この上なかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。



引越しのために故郷に帰ってきた主人公であったが、引越しのついでに、悲しい現実を飽きるほど思い知らされることになった。村は、寂寥の感が胸にこみ上げるほどにわびしくなり、ヤンおばさんは豹変し、ルントウまでもが、立場を利用して主人公から物をもっていくようになってしまった。そのせいか、主人公はいろいろと悲しくなり、船で村を去ると同時に黄昏の中で薄墨色に変わって、船尾に消えていくように、主人公の心からも、二十年前の美しかった故郷が消えていった。

くん

ついに引越しの日が来た。ルントウは朝から来ていた。しかし、見送りに来たにも関わらず、二人は一切話をしなかった。物を取りに来て

三年二組

氏名

いたルントウが主人公とは話しにくかったのだ。物をとったという証拠に、青豆や灰などを使ったりして、相手の立場を利用して悪いことをしている。ルントウはいいやつだと思ったが、悪いやつに変わっていた。主人公は、「お金がなくなると人は変わってしまう」と改めて、金の怖さを知ったのであった。

くん

主人公の引越しの日、ルントウは五歳の娘を連れて見送りに来てくれた。一日中忙しく、話すことはできなかった。結局話をすることなく船に乗り込んだ主人公は、ホルルの問いにはっと胸をつかれた。

ルントウが見送りに来たのであれば、五歳の娘ではなく、シュイシヨンを連れてくるはずだし、以下に忙しいとはイエ、彼の言葉ぐらいはいに来るはずだ。結局ルントウは、自分が埋めた椀や皿を取りに来ただけで、見送りに来たわけではないと気付いた。主人公は、今までのルントウの面影などなくなり、二人の間には、友情なんていうものがなかったと知った主人公は、本当に一人になってしまったのだと思った。

くん